

# 大学生の意識調査からみえるセクシャルマイノリティ教育について

著者	中山 俊昭
雑誌名	大和大学研究紀要
巻	7
ページ	73-82
発行年	2021-03-15
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1677/00000207/">http://id.nii.ac.jp/1677/00000207/</a>



## 大学生の意識調査からみえるセクシャルマイノリティ教育について

### Regarding Sexual Minority Education from a Survey of University Students' Awareness

中山 俊 昭\*  
NAKAYAMA Toshiaki

#### 要 旨

教育学部1回生に、LGBT等セクシャルマイノリティに関するアンケート調査を行った。その結果をもとに、セクシャルマイノリティ教育をどのように取り組むべきか検討した。アンケートはグーグルドライブで作成し、Web上で回収した。無記名で、LGBT、LGBTQ、SOGIに対する理解度を2件法で尋ね、さらに、自由記述を求めた。有効回答者数は141名で、Fisherの直接法を用い分析した。結果、男女での有意な差はなかった。学校で学習した学習群と学習していない非学習群ではLGBTに対する理解度のみに有意な差がみられた。

また、LGBTという言葉は約9割の学生が知っていたが、全ての人が持っている属性である「性的指向 (Sexual Orientation)」と「性自認 (Gender Identity)」の頭文字をとった「SOGI」という言葉はほとんど知らなかった。

自由記述では、「LGBTは個性であり多様性をみとめるべきだ」等の肯定的な意見も多くみられた。しかし、「LGBT」という認知が進めば進むほど、「マイノリティ」対「マジョリティ」という考えで捉える傾向が伺われた。従って、SOGIの考え方を推進する教育の重要性が示唆された。

#### Abstract

In this study, 1st year students of the education department were surveyed regarding their attitudes towards sexual minorities such as LGBT. The results were used to investigate how sexual minority education was being addressed. The survey was compiled using Google drive and the results were collected over the internet. The survey, conducted anonymously, was comprised of dual-choice answers to questions on their level of understanding of LGBT, LGBTQ and SOGI, with space for a free description. The 141 valid replies were analyzed using Fisher's exact test. The results showed no significant difference between male and female participants. A significant difference was observed between those who had undertaken LGBT studies and those who had not.

Almost 90% of participants knew the term LGBT, while very few knew the term SOGI, derived from the initials for Sexual Orientation and Gender Identity, attributes we all possess.

Many positive expressions were observed among the free descriptions, such as 'LGBT recognizes individual diversity.' However, it appears that as awareness of 'LGBT' increases, a tendency to question whether the issue will be defined as 'minority versus majority' was observed. Therefore, the importance of education to increase awareness of SOGI has been suggested.

キーワード：教育	SOGI	LGBT	セクシャルマイノリティ	性同一性障害
keywords : education	SOGI	LGBT	sexual minority	gender identity disorder

#### I はじめに

##### 1. 背景

近年、LGBTに関するニュースは、テレビ、ネット等様々なメディアでよく見聞きする。LGBTは、女性同性愛の「レズビアン (Lesbian)」、男性同性愛の「ゲイ

(Gay)」, 両性愛者の「バイセクシャル (Bisexual)」, 性的越境者の「トランスジェンダー (Transgender)」の略で、セクシャルマイノリティの方々を表す言葉である。しかし、当事者の性自認や性的指向はLGBTだけではくくれない。性自認で男性でも女性でもなく性

別が不定形を意味する「Xジェンダー (X-gender)」がある。性的指向では、全人愛の「パンセクシャル (Pansexual)」, 他に、風変わりなを意味する「クイア (Queer)」, 自身を何者か定めない「クエスチョニング (Questioning)」, 性愛の対象を持たない「Aセクシャル (A sexual)」等もある。

また、マイノリティとマジョリティの対比でも使用される言葉として、同性愛の「ホモセクシュアル (Homosexual)」に対して異性愛の「ヘテロセクシュアル (Heterosexual)」, 性的越境者を意味する「トランスジェンダー (Transgender)」に対して非越境者の「シスジェンダー (Cisgender)」等実に多様である。このようにLGBTだけで表現できない多様な状態を表す場合、LGBTQやLGBT+と表現することもある。

他に、マイノリティ対マジョリティとかの捉え方ではない表現にSOGIがある。SOGIとは、自分は、どの性別を好きになるのか、ならないかの「性的指向 (Sexual Orientation)」と自分の性別をどう認識しているかの「性自認 (Gender Identity)」の頭文字を取った言葉で、一般に人の属性を表す。従って、全ての人は何らかの属性をもつことになり、マイノリティ対マジョリティの構図ではなく多様性をお互いに認め合うという概念である。

教育現場では、このような性の多様性を捉えた教育がなされているだろうか。

文部科学省 (平成22年) は、「児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について」を学校に通知した。性同一性障害のある児童生徒に係る対応で、きめ細やかな対応が必要であること。児童生徒の不安や悩みをしっかりと受け止め、児童生徒の立場から教育相談を行うこと等を求めている。これは、担任や管理職をはじめ、養護教諭、スクールカウンセラー、職員等がチームで協力し、保護者の意向も配慮しつつ、児童生徒の実情を把握し、心情に十分配慮した対応を実施することである。

では、実際、このような性別に違和感を持つ児童生徒はどのくらい在籍しているのだろうか。

文部科学省 (平成26年) は平成25年04月～12月の期間に、「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」を国公私立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校に各都道府県教育委員会を通じ調査を行った。結果、何らかの性別違和を感じている子どもの件数の合計は606件 (戸籍上男・女の両方を含む) で、内訳は、戸籍上の性別が①男: 39.1% (237件), ②女: 60.4% (366件), ③無回答: 0.5% (3件) であった。

文部科学省は、この調査結果を受け、平成27年に、「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」という通達を出した。この通達は、

悩みや不安を受け止める必要性は、性同一性障害に係る児童生徒だけでなく、いわゆる「性的マイノリティ」とされる児童生徒全般に共通するものであることを明らかにし、きめ細やかな対応を求めている。しかし、教育現場にこの通知の意味は伝わり、対応できているのであろうか。

吉川 (2017) によれば、沖縄県教職員の性の多様性に関する調査で、教員養成機関や研修会で多様な性について学んだ経験があるのは全体の1割に満たないこと、授業で「性の多様性」を取り上げた経験があるのは全体の5.1%であること、教職員間でも差別的言動があること等を報告している。

日高 (2017) は、LGBT当事者のオンライン調査 (回答数15,064名) において、学校生活 (小・中・高等学校) で、「ホモ・おかま・おとこおんな」などの言葉によるいじめ被害率は63.8%で、「服を脱がされる」といういじめの被害率は18.3%と報告している。

「いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン」(2014) の「LGBTの学校生活に関する実態調査 (2013) 結果報告書」(回答数609名) では、自分の性的指向や性自認に気づくのは小学生や中学生の頃が最も多く、性別違和のある男子は小学校入学前からとの回答が25%もあったと報告している。

また、教師の児童生徒に対する「おかま」「ゲイ」等の不適切な言葉で苦しんでいる報告例は後をたたない (一例: LGBT総合アライ (2017), 七崎良輔 (2019) 等)。

さらに、教育実習生より、「性同一性障害の生徒との出会いがありどのように対応するのがよいか迷った」との声を聞くことが複数あった。それらの事例では、その生徒に対する教職員からの説明等はなく、学校組織として性同一性障害に対し、上記の通達のような配慮は感じられなかったとのことであった。

以上のことから、セクシャルマイノリティ教育の重要性が伺える。

## 2. 目的

本研究は、学生にどのような視点でセクシャルマイノリティ教育を推進すべきか探索することを目的とする。

## Ⅱ アンケート調査

### 1. 研究対象

対象は、大学の講義にてまだ、LGBT等を教授されていない1回生で教育心理学 (中等) を調査当日 (9月20日) に受講登録している学生150名である。

## 2. 調査方法

研究方法としてアンケートを作成した。アンケートはLGBT, LGBTQ, SOGIの認知度, 理解度を知るためにグーグルドライブで作成した。答えはラジオボタン方式（はい いいえ）の2件法で行い, 最後に自由記述を求めた。また, 無記名とし, WEB上で回収した。

## 3. 期間

2020年09月20日（配信）～21日（締め切り）

## 4. 質問内容と項目

LGBT, LGBTQ, SOGIの認知度, 理解度を知るために以下の項目を尋ね, 最後に, LGBT等に対する自由記述を求めた。

- ① あなたの性別。 （男性 女性 その他）
- ② LGBTという言葉を知っている。 （はい いいえ）
- ③ LGBTという言葉の意味を理解している。 （はい いいえ）
- ④ 学校で学習したことがある。 （はい いいえ）
- ⑤ LGBTのLの意味を理解している。 （はい いいえ）
- ⑥ LGBTのGの意味を理解している。 （はい いいえ）
- ⑦ LGBTのBの意味を理解している。 （はい いいえ）
- ⑧ LGBTのTの意味を理解している。 （はい いいえ）
- ⑨ LGBTQという言葉を知っている。 （はい いいえ）
- ⑩ LGBTQの意味を理解している。 （はい いいえ）
- ⑪ SOGI（ソジ, ソギ）という言葉を知っている。 （はい いいえ）
- ⑫ SOGI（ソジ, ソギ）という言葉の意味を理解している。 （はい いいえ）
- ⑬ LGBTや性同一性障害について自由に書いてください。

## 5. 分析方法

数量データの分析はSPSS Ver22を用い集計・分析を行った。統計学的解析は実数で0を含むセルがあったためFisherの直接法で行った。P値が, 0.05未満の場合を有意とした。

自由記述部分ではできる限り分析の恣意性を排除する目的と, 自由記述の視覚化を意図し, テキストマイニングの手法で分析した。テキストマイニングは文章データを形態素解析し, 数値化, 多変量解析によりデータを処理したものである。本稿のテキストマイニング分析には樋口（2019）が開発したフリーソフトであるKHCoder 3を用いた。

## Ⅲ 結果と考察

### 1. 数量部分の結果

返信数144名で, 有効回答は142名であった。尚, 性

別に関して, 1名のみ「どちらでもよい」という回答があった。他2件が白紙であった。「どちらでもよい」の1名は統計分析上割愛し, 分析は男性79名 女性62名, 合計141名を対象に行った。

男女別とLGBT, LGBTQ, SOGIという言葉を知っているか, 「理解している」かをクロス集計したものを表1にまとめて示した。すべてのクロス集計項目において男女における有意な差はなかった。

単純集計において, 「LGBTという言葉を知っている」かに対しては, 全体の87.9%の者が知っていたが12.1%の者は知らなかった。

また, 「LGBTという言葉の意味を理解している」は男女とも約80%以上の者が理解していると答えている。

次に「LGBTのLの意味を理解している」かを尋ねると, 男性が73.4%と女性が66.1%と減ってくる。「G」の「ゲイ」に関しては, 男女とも「L」の「レズビアン」とほぼ同程度の理解度であった。

「B」の「バイセクシャル」や「T」の「トランスジェンダー」になると理解している者が60%前後まで低くなっていく。

さらに, LGBTQになると男女とも, 言葉を知っている者が20%台まで少なくなり, その意味の理解になると10%台になり, SOGIに至ってはほとんどの学生が知らないという結果であった。

続いて, 小中高等学校で性同一性障害やLGBTの学習を行った経験群（以下, 学習群）とそうではない群（以下, 非学習群）とに分け, LGBT, LGBTQ, SOGIという言葉を知っているか「理解している」かをクロス集計し, まとめたものを表2に示した。

結果, LGBTに関して, 学習群と非学習群では有意な差がみられた。しかし, LGBTQ及びSOGIの理解度に有意な差はなかった。

### 2. 数量部分の考察

アンケートの数量統計において「LGBTという言葉を知っている」か等を男女でクロス集計した結果に有意な差はみられなかった。しかし, 学校での学習群と非学習群ではLGBTの理解度に有意な差がみられた。ただし, LGBTQやSOGIに関しては有意な差はなかった。

この結果より, 学校で学習することは知識の定着に関して意味があると言える。

また, 学ぶ側も学ぶ意欲を持っているとの報告もある。周ら（2019）の研究で, 大学生470人に行った, 大学におけるトランスジェンダーに関するアンケート調査で, 「トランスジェンダーや性同一性障害について学校で教えるべきだと『思う』または『どちらかと思う』と回答した肯定群は93.2%であった」との報告もあり教育の果たす役割は重要と再認識した。

表1 LGBT,LGBTQ,SOGIの理解度 (男女別)

n=141

		男 (n=79)	女 (n=62)	P 値
②LGBTという言葉を知っている	はい	71 (89.9%)	53 (85.5%)	n.s.
	いいえ	8 (10.1%)	9 (14.5%)	
③LGBTという意味を理解している	はい	66 (83.5%)	50 (80.6%)	n.s.
	いいえ	13 (16.5%)	12 (19.4%)	
⑤LGBTのLの意味を理解している	はい	58 (73.4%)	41 (66.1%)	n.s.
	いいえ	21 (26.6%)	21 (33.9%)	
⑥LGBTのGの意味を理解している	はい	60 (75.9%)	42 (67.7%)	n.s.
	いいえ	19 (24.1%)	20 (32.3%)	
⑦LGBTのBの意味を理解している	はい	53 (67.1%)	38 (61.3%)	n.s.
	いいえ	26 (32.9%)	24 (38.7%)	
⑧LGBTのTの意味を理解している	はい	48 (60.8%)	36 (58.1%)	n.s.
	いいえ	31 (39.2%)	26 (41.9%)	
⑨LGBTQという言葉を知っている	はい	20 (25.3%)	14 (22.6%)	n.s.
	いいえ	59 (74.7%)	48 (77.4%)	
⑩LGBTQの意味を理解している	はい	11 (13.9%)	9 (14.5%)	n.s.
	いいえ	68 (86.1%)	53 (85.5%)	
⑪SOGIという言葉を知っている	はい	2 (2.5%)	2 (3.2%)	n.s.
	いいえ	77 (97.5%)	60 (96.8%)	
⑫SOGIの意味を理解している	はい	2 (2.5%)	0 (0.0%)	n.s.
	いいえ	77 (97.5%)	60 (100%)	

n.s.:有意差なし

表2 LGBT,LGBTQ,SOGIの理解度 (学習群と非学習群別)

n=141

		学習群 (n=72)	非学習群 (n=69)	P 値
②LGBTという言葉を知っている	はい	72 (100%)	52 (75.3%)	0.000**
	いいえ	0 (0%)	17 (24.6%)	
③LGBTという意味を理解している	はい	70 (97.2%)	46 (66.7%)	0.000**
	いいえ	2 (2.8%)	23 (33.3%)	
⑤LGBTのLの意味を理解している	はい	62 (86.1%)	37 (53.6%)	0.000**
	いいえ	10 (13.9%)	32 (46.4%)	
⑥LGBTのGの意味を理解している	はい	63 (87.5%)	39 (56.5%)	0.000**
	いいえ	9 (12.5%)	30 (43.5%)	
⑦LGBTのBの意味を理解している	はい	61 (85.7%)	30 (43.5%)	0.000**
	いいえ	11 (15.35%)	39 (56.5%)	
⑧LGBTのTの意味を理解している	はい	58 (80.6%)	26 (37.7%)	0.000**
	いいえ	14 (19.4%)	43 (62.3%)	
⑨LGBTQという言葉を知っている	はい	20 (27.8%)	14 (20.3%)	n.s.
	いいえ	52 (72.2%)	55 (79.7%)	
⑩LGBTQの意味を理解している	はい	14 (19.4%)	6 (8.7%)	n.s.
	いいえ	58 (80.1%)	63 (91.3%)	
⑪SOGIという言葉を知っている	はい	3 (4.2%)	1 (1.4%)	n.s.
	いいえ	69 (95.8%)	68 (98.6%)	
⑫SOGIの意味を理解している	はい	2 (2.8%)	0 (0.0%)	n.s.
	いいえ	70 (97.2%)	69 (100%)	

n.s.: 有意差なし \*\*: P<0.01

単純集計では、この集団の87.9%の者がLGBTという言葉を知っており、言葉そのものはかなり認知されていることがわかる。また、LGBTの各イニシャルの意味に関して、「L」の「レズビアン」、「G」の「ゲイ」等は約70%以上の者が理解している。「L」の「レズビアン」と「G」の「ゲイ」は同性愛というくくりのセットでもよく耳にしており、意味も理解しているように思われ、同性愛については認知しているようである。

しかし、「B」の「バイセクシャル」の理解は男67.1%、女61.3%、「T」の「トランスジェンダー」の理解は男60.8%、女58.1%と徐々に少なくなっていく。

そして、LGBTQの言葉を知っている者になると男25.3%、女22.6%とぐっと少なくなり、意味の理解は男13.9%、女14.5%、SOGIは言葉を知っている者が、男2.5%、女3.5%、意味理解に至っては男2.5%、女は0%であった。

これは今まで小中高等学校でLGBT関連の学習は進んでいるがSOGIの概念に関する授業は、ほぼ行っていないことを意味する。

これらの結果より、学習することの重要性が明らかになった。

### 3. 自由記述部分の結果

#### (1) 記述の統計量

前処理として、語の取捨選択を行い、「性同一性障害」「トランスジェンダー」「クロスドレッサー」などの複合語はタグ付けし、「思う」及び「助動詞」、「助詞」は省き分析を行った結果、総抽出語の数は3,717、異なり語数は、548、文は178であった。

#### (2) 頻出語について

10回以上の頻出単語を並べると、「人」「理解」「LGBT」「自分」「考える」「言う」「必要」「周り」「知る」「問題」「性同一障害」「出会う」「認める」「性別」の順に特徴語が並んだ。頻出単語と出現頻度7回以上、上位33までの語を表3に示した。

#### (3) 共起ネットワーク

次に、共起ネットワークでの頻出語の関係性を検証する。

共起とは、あるキーワードが出現するときに、一緒に出現する（利用される）語のことをいい、KHCoder3では、ある語とある語の共起性、関係性を視覚的に捉えることができる。

共起ネットワーク図は、自由記述内の各頻出単語6回以上で設定した。なお、頻出回数が多い単語ほどバブルが大きく表示され、結びつきの多い単語は太く表示される。これらの語を基に、各単語は、どの言葉と多く共起

表3 自由記述の頻出語

	抽出語	出現回数
1	人	58
2	理解	38
3	LGBT	37
4	自分	26
5	考える	18
6	言う	16
7	必要	15
8	周り	13
9	知る	13
10	問題	12
11	性同一障害	12
12	出会う	11
13	認める	11
14	性別	10
15	感じる	9
16	個性	9
17	世間	9
18	性	9
19	意味	8
20	子	8
21	聞く	8
22	少し	8
23	好き	7
24	自由	7
25	受け入れる	7
26	障害	7
27	相談	7
28	増える	7
29	多様	7
30	偏見	7
31	本人	7
32	目	7
33	話	7

したのかの共起ネットワーク図を図1に示した。

共起ネットワーク図を読み解くと、「人」は「LGBT」「性同一性障害」に対して理解している。又は「理解していない」と読める。従って、「理解」が用いられている原文を参照して、どのように用いられているかを検証した。尚、該当単語に太字、アンダーラインを施した。

#### 「理解」の原文より

否定的に書かれた意見は以下の2件で、合計3回出現していた。

- ① LGBTの子には私たちが理解しにくい問題などがあるのかなと思いました。
- ② 生きづらい世の中だと思う。理解はしていても、そうでない人が恋愛対象になったときの理解は難しいと思う。

次に、肯定的意見や中立的な意見は31件で35回の出

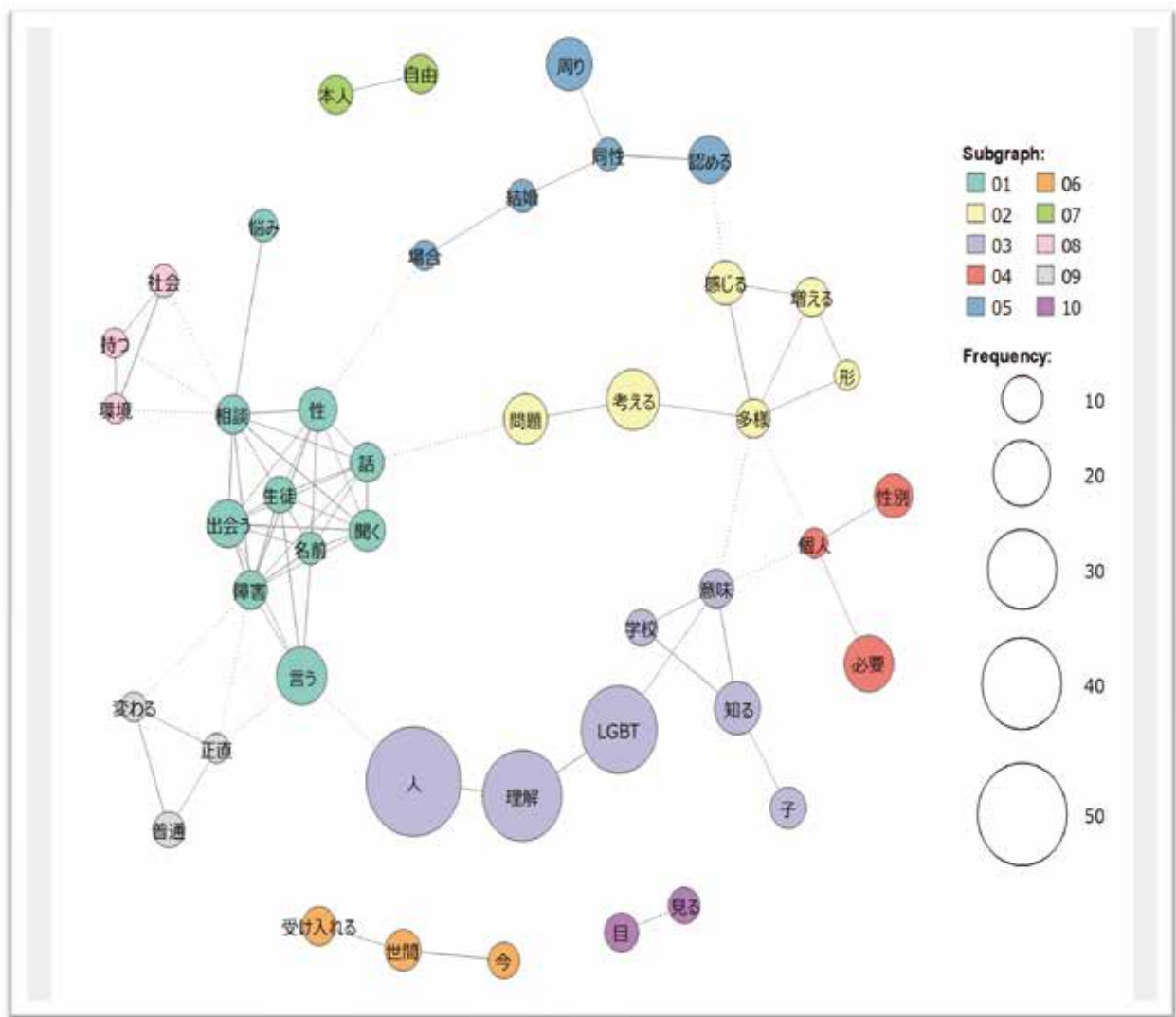


図1 共起ネットワーク図

現であった。肯定的な意見の一部を以下に示す。

- ③ 性同一性障害はある程度、理解のある社会になっていると思う。
- ④ 日本でもLGBTについての理解を深めていく必要があると考えています。
- ⑤ 学校でLGBTの生徒に出会ったら、相談相手として話してほしいので、そのようなことがあると言うことを理解したい。
- ⑥ 他の人に理解されにくいので、大勢の人が主体的に学ぶべきだ。
- ⑦ 最近増えてきているから理解が必要。
- ⑧ いろいろな人もいるので、理解すべき問題だとは思う。

このような結果から、「人」は「LGBT」や「性同一性障害」の人に対して、「理解」が進んでいるとの思いを持った学生が多いと読める。

さらに、図1の共起ネットワーク図を見ると「本人」

と「自由」が共起しており、「LGBT」等は「本人」の「自由」であると読める。他に「今」と「世間」と「受け入れる」が共起している。これは、「今」、「世間」では「LGBT」等を「受け入れ」ていると読めるのではないだろうか。

では、この「受け入れる」に関して、既に「受け入れている」傾向なのか、これから「受け入れる」必要があるのか。又は「受け入れていない」のかを原文で確認する。尚、該当単語に太字、アンダーラインを施した。

#### 「受け入れる」の原文より

- ① 世間はどんどん認めていこうという方向に進んでいるが、実際に受け入れている施設はなかなか少ないので日本は十分に受け入れられているとはいえないかなと思う。
- ② 定期的に話題になるけど、私にはまだ偏見などがあります。しかし、私は人それぞれであると思うので

どんな人でも受け入れていく必要があると思います。

- ③ その人の個性であるから受け入れて共存していくべきだと思う
- ④ 世間は受け入れていこうと言っているが設備的には改善されていないと感じます。
- ⑤ 否定的に捉えられがちなことですが、人間である以上、そのような個性も受け入れるべきではないかと思います。
- ⑥ 理解が進み、当たり前のように受け入れられるようになる必要があると思います。
- ⑦ 世間はもっと受け入れるべき。

否定からの意見もあったが、だからこそ受け入れていくべきとの方向性で終わっている。現状はまだ理解されていないからこそ、前向きに受け入れていこうとの回答が多かった。原文での設備とはトイレ等のことを意味していた。

続いて、「多様」または「多様性」に関して、「認められている」のか「認められていない」のか、だから「どうすべき」との答えが多いのかを原文で確認した。尚、該当単語に太字、アンダーラインを施した。

「多様」または「多様性」の原文より

- ① 近年増えつつあるが、多様性という観点でそれぞれの形があって良いと思う。
- ② 近年増えている多様性という観点で、様々な差別的な目で見られる人があるかと思っていて、実際のLGBTによる分別に拘る必要はなく、性別も個人の特性として多種多様であると私は考えています。いわば性別も個性の一部と捉えているということです。
- ③ 意味や理解等に努めたことがないのですが、今後、教員を目指すにあたっては、生徒の多様な悩みに寄り添うためにも深い学習をする必要を感じています。
- ④ 多様性が認められる時代のはずなのに周りの視線などから、隠す傾向にある。また、それは当事者の自由で、そのようなことがあるということを理解したい。

他に①とほぼ同様の内容が3つあった。その3つも含め、内容は全て肯定的であった。しかし、④は「周りの視線などから、隠す傾向にある」と指摘している。これはなぜなのか。たとえ自由な空気になったとしても、そのような思いの当事者もあり、あくまで当事者の思いが最優先されることは学びたいと思うということであろう。

これらの内容から、共起ネットワーク図上は、「多様」・「多様性」を認めていると「感じる」と読み取れた。

さらに、「周りは」「同性婚」など「認める」ことが重要であり、「LGBT」や「性同一性障害」の人と「出会う」ことがある場合、「話」を聞くことや「相談」にのることが鍵であると読める。

#### 4. 自由記述部分の考察

このように、自由記述も概ね肯定的に読み取れた。しかし、中には、「私がLGBTなら誰にも言わない白い目で見られるから」や「自分たちとは感性が違う人」等の回答等、ややネガティブな感覚で捉えて回答している意見も散見する。さらに、無記名であるからかもしれないが、「自分に近いものを感じています。医師にかかったことはありませんが」や「自分はクロスドレッサーだが、普通に友達は接してくれる」等、自分自身が当事者であると読み取れる回答も5件あった。総合考察では自由記述での文章を引用しながらさらに考察を深めていく。

### IV 総合考察

#### 1. LGBT等の理解度について

学校でLGBT等の学習したことのある者が51%いた。このことも関係しているのかもしれないが、LGBTという言葉の認識は、141名中124名、87.9%の者が知っており、大学生の間では、この言葉は広く認知されていることが伺われた。

しかし、反面、今回のアンケートの自由記述では、「LGBTという言葉は今、初めて目にしました」との回答もあり、17名、12.1%の学生が「知らない」と答えている。この結果は、今後のセクシャルマイノリティ教育に活かす必要があり、さらなる学習環境の構築が必要と感じる。

また、自由記述の中に、「最近メディアにLGBTの著名なタレントが多く出演し一般的になった」との回答も複数みられた。この自由記述に書かれたタレントは全て男性から女性の場合のパターンであった。

一般に、男性から女性にトランスする人をMTF (Male to Female) といい、女性から男性にトランスする人をFTM (Female to Male) というが、これらの意見から、性同一性障害に関しては男性から女性のMTFのイメージが強くジェンダーステレオタイプの視点を持つものも多いのではないと思われる。

しかし、前出の平成26年の文部科学省の調査では戸籍上の性別が「男性から女性へ」が39.1% (237件)、「女性から男性へ」が60.4% (366件)で、「女性から男性へ」のトランス指向の方が「男性から女性へ」より多くみられている。福田ら (2014) の、長崎大学病院性同一性障害外来における統計でも女性から男性、いわゆるFTMが118名に対してMTFが49名とFTMの患者が



多かったという現実がある。

また、アンケートに書かれたタレントの方は、性別に違和を感じている性同一性障害の方と、女性の装いではあるが性同一性障害ではなく同性愛であるとされている方もいた。このようにLGBTを知っているかとの問いに関して、「知っている」との回答は多くあるが、「T」のトランスジェンダーのことに對して、アンケート文面より正しく理解しているとは言い難い。トランスジェンダーの概念は、狭義には「クロスドレッサー（Cross dresser）」、「トランスヴェスタイト（Transvestite）」と呼ばれる異性装の段階の者から「トランスセクシャル（Transsexual）」といい、いずれは身体を望む性に手術する性別違和まで幅が広いので理解が難しいことが伺える。

また、LGBTの「L」の「レズビアン」と「G」の「ゲイ」は、同性愛というくくりで理解しているようであるが、「B」の「バイセクシャル」になると理解度が下がり、「T」の「トランスジェンダー」になるとさらに理解度が下がる。

言葉は聞いたことあるが意味は分からないという者が増えていることがわかる。

一見、LGBTという言葉が広がり理解度が増したととれるが、性に対する画一的な思考による偏見は解消されているとは言い難い。ましてや、LGBTQやSOGIに至ってはまだまだ理解されていない。

## 2. 他のアンケート結果との比較からの推察

周ら（2018）の、2017年6月～9月のアンケート結果に、高等学校生1164人のうち123人、11.0%の者がLGBTに関する学習経験があったと回答している。

本研究では回答者141人のうち、37人、26.2%の者が高等学校で学んでいる。サンプル数の違いで単純比較はできないが、本研究の学生の方が高等学校で多くLGBT等を学んでいることになる。

では、なぜであろうか。この2017年の調査と2020年の本調査の3年間に何か理由があるのだろうか。

考えられる理由の一つとして、高等学校では、2017年度から性の多様性を取り上げた教科書が出てきたことも関係しているのかもしれない。LGBT等に関する学びは今までは主に保健体育であったり、総合的学習であったりしたが、新課程に入り、家庭科の教科書等でも取り上げられている。

一例として、開隆堂の家庭科教科書「家庭基礎」では、「性同一性障がい」を「身体の性」と「自分の性」をどのように認識しているかという「性自認」が一致せず、強い違和感で、日常生活でも困難を感じる状態と説明し、「マイノリティ」は単に人数が少ないというだけでなく、差別構造の問題によって、社会的に弱い立場に

ある等の説明がなされている。

このように教育現場では、この3年の間に少しずつではあるがセクシャルマイノリティに関する資料や学習も増え知識理解は進んでいると推察される。そうであればあるほど、教師はセクシャルマイノリティについて正しく理解しなくてはならないと考える。

## 3. カミングアウトの問題と教育相談

アンケートの中に、「自分が当事者なら絶対カミングアウトしない。白い目で見られる」との意見があった。

教育現場では、子どもたち自身が自身のセクシャリティに関する悩みを打ち明けにくいことが多く考えられる。藤田ら（2015）は、小学校以前から性別違和を持っていた性同一性障害当事者のMTF52名、FTM61名に小学校の頃のカミングアウトについてアンケートを行った。結果は、「絶対に伝えまいと思っていた」がMTFは50%で、FTMは36%であった。逆に「すぐに伝えた」はMTF0%でFTMは10%であった。

また、今の自分のことが「理解できず伝えられなかった」がMTFは15.2%、FTMは6.0%であった。この結果よりMTFの方がカミングアウトに困難を感じていたことがわかる。それは、社会的な男女イメージで、男らしく、女らしくの2つしかない世界観の中でマイノリティかマジョリティかの物差しでしか判断されない現実があるのかもしれない。

しかし、カミングアウトが行われていない状況下では、周りはわからず支援は行われにくいだろう。もし、教師が児童生徒からカミングアウトを受けたなら勇気をもって話してくれたことを尊重し、受容し、共感し、寄り添うことが何よりも重要であると考え。教師は、いつでも相談に乗ることができる雰囲気为学校全体で構築しなくてはならない。従って、教師にとって、教育相談的対応ができるか否かは重要なこととなる。

また、当事者からカミングアウトされた場合、本人の同意なしに、その当事者理解のためによかれと思い第三者に伝えることは絶対にしてはならない。この行為をアウティングというが、このアウティングは人の命を奪う場合もあり、絶対に本人の同意なしに行ってはいけないものである。教師をはじめとする理解者、支援者は守秘を徹底しなくてはならない。

## 4. LGBTからSOGIへ

自由記述アンケートの中に「LGBTはそれぞれが、かなり異なっており同じようにはくれない」という意見があった。セクシャルマイノリティの間でもそれぞれに違いがあり、お互いを認め合うことも課題のひとつであるという意味に捉えられる。

「本人の自由であり、第三者が口に出すことも無く偏

見ありません」や「その人たちに対して嫌な目線をしたりするのではなく十分な理解をすることが大切だと思います」といった意見があった。一見、理解し肯定表現と理解できるが、自分とは異なる人のことだと解釈できる。また、「そのような人に出会ったことがない」や「性同一性障害の子がいました」や「他人事ですがかわいそうだと思います」等、否定はしないが、自分とは違う人であり、理解や同情はするが、セクシャルリティにおいては、誰も対等であるとの思いは感じられない。

このようにLGBT等の表面的な理解だけが進めば、「当事者」＝「マイノリティ」対「第三者」＝「マジョリティ」という構図が出来上がってくる可能性があることと危惧する。セクシャルマイノリティでカテゴライズされることからくる「マイノリティ」差別にも繋がる可能性を示唆しているとも捉えられる。

このことに対して前出のSOGIの考え方がとても重要となる。SOGIは、自分がどの性別を好きになるのか、ならないかの「性的指向 (Sexual Orientation)」と自分の性別をどう認識しているかの「性自認 (Gender Identity)」で表す考えで、性に関し、SOGIという属性で、全ての人が、対等、平等で必ずどこかに当てはまり、お互いを尊重し合い、多様性を認め合うという構図となる。その意味では、全ての人が当事者であり対等であるという考えになる。

松尾 (2019) によれば、倉敷市の教育現場では、LGBT理解の教育ではなく、SOGIの理念を推奨している。「教師の『女/男らしく』『男/女のくせに』など何気ない一言が子どもを傷つけることがある。『違うってすてきだね』『違いは豊かさを生む』という教師自身がポジティブな捉え方をすることが肝要」と述べている。

堀江 (2018) は性的マイノリティをめぐる相談業務から、「性にかかわるマジョリティ規範には性別二元論と異性愛主義がある」と述べている。

LGBTという言葉は認知されればされるほど、マジョリティ対マイノリティという差別的な構造に追いやられる構図があると考えられる。

また、佐々木 (2019) はジェンダースペクトラムが意識されないと「男でなければ女になる」といった「男女二分法」の理解が促進されるとし、ジェンダースペクトラムを意識した心理的サポートを提唱している。「イチかゼロか黒か白かではなく、豊かなスペクトラムの中でどの位置だと心地よく思えるのか自身が模索できるような環境づくりが重要」と述べている。

このようなアンケートの文言及び先行研究より、セクシャルマイノリティ教育については「SOGI」の理念で教育を進めていくことが重要であるということが示唆された。

## V. おわりに

学生のアンケートからは、「今後、教員をめざすにあたっては、生徒の多様な悩みに寄り添うためにも深い学習をする必要性を感じています」や「そのような生徒に出会ったら、相談相手として話してほしいので、理解を深めたい」等の記述があり、教育に携わる者にとってセクシャルマイノリティ教育は重要なものと受け止めていることも伺われた。

また、セクシャルマイノリティ教育を推進していくにあたって、康 (2017) は、「子どもが性の揺らぎや多様性に向き合っていくことは本来必要なことであり、子どもがあらのまま振る舞える関係性や環境を整えることは、社会適応や自己肯定感を向上していくうえで重要なポイント」と述べ、この性の揺らぎが最も大きいのは学校に通っている時期であり、あらのまま振る舞える関係性を構築できるのは教師である。そういう意味においても教師にとってセクシャルマイノリティ教育は重要なものとなる。

セクシャルマイノリティ教育を推進していくには、SOGIの理念のもと、この子どもたちの揺らぎに、寄り添い、子どもたちが、困難や苦悩を一人で抱え込むことなく、共に歩んでいける教師になることが何よりも重要であると強く感じられた。

## 文献

藤田志保, 松本麻衣, 久保光太郎, 長谷川徹, 新井富士美, 富岡美佳, 中塚幹也:「小学生の頃の性同一性障害当事者のカミングアウト」GID学会 8 33-39 2015

福田和久, 船本優子, 生塩詞子, 井川掌, 井上統夫, 金子賢一, 田中克己, 岩永竜一郎, 木下裕久, 黒滝直弘, 今村明, 中根秀之, 小澤寛樹:「長崎大学病院性同一性障害外来における受診者の特徴」GID学会 7 27-33 2014

日高庸晴:「LGBT当事者の意識調査「REACH Online 2016 for Sexual Minorities」LGBT 当事者の意識調査 ～いじめ問題と職場環境等の課題～宝塚大学看護学部日高研究室 2016

(最終閲覧日:2020年11月25日)

[https://www.health-issue.jp/reach\\_online2016\\_report.pdf](https://www.health-issue.jp/reach_online2016_report.pdf)

堀江有里:「異性愛主義と性別二元論が生み出す差別―排除の主体は誰なのか」日本教育心理学会年報第57 292-295 日本教育心理学会 2018

いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン:

「LGBTの学校生活に関する実態調査（2013）結果報告書」2014

（最終閲覧日：2020年11月25日）

<https://uploads.strikinglycdn.com/files/e77091f1-b6a7-40d7-a6f2-c2b86e35b009/LGBT学校生活調査.pdf>

開隆堂：平成29年度高等学校家庭教科書「家庭基礎」

康 純：「性別に違和感がある子どもたち」合同出版  
2017

LGBTアライ：[www.lgbt-kyokai.com/ally.html](http://www.lgbt-kyokai.com/ally.html)（最終閲覧日：2020年11月25日）

松尾真治：「性の多様性」を学び、誰もが尊重される学校へ GID学会 12 225-227 2019

文部科学省：「児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について」平成22（2010）年

文部科学省：「平成25年4月～12月の期間に、学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」  
平成26（2014）年

文部科学省：「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」平成27（2015）年

七崎良輔：僕が夫に出会うまで 文藝春秋 2019

佐々木掌子：「ジェンダー・スペクトラムを意識した心理的サポート」 GID学会 12 228 2019

周宇，南原あかり，樫野千明，瀬尾奏衣，中原幹也：「高校生，大学生におけるLGBTに関する知識と意識」  
GID学会 11 157-173 2018

周宇，難波瑞穂，樫野千明，服部瑠衣，中原幹也：「トランスジェンダー当事者の大学における部・サークル活動」への大学生の意識 GID学会 12 51-67 2019

吉川麻衣子：沖縄県の学校現場における「性の多様性」の実態—教職員を対象とした基礎調査をもとに—  
沖縄大学人文学部紀要 19 1-15 2017